「笹川杯作文コンクール 2010」～中国語で応募～ 第 5 回優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

「松平容保と張勲を比較して－中日の“義理観”談義－」

四川省　周夢娜

松平容保(1836-1893)は江戸時代後期の人物で、会津藩の末代藩主である。佐幕派の重要人物として、京都の治安維持を名目に(実は、倒幕を掃討するため)、“京都守護職”を拝命した。また、“蛤御門の変”、“鳥羽・伏見の戦い”、“会津戦争”など多くの戦役により、維新勢力の敵となった。そして、重要な諜報暴力組織“新撰組”を設立したのも彼である。

こうした人物は、私のような中国人から見ると、まさに“維新の敵”と言うべき存在である。“明治維新”は封建主義から資本主義への重大な改革であり、“黒船来航事件”後に開国を迫られ、欧米列強の植民地化という危機に瀕していた日本が救われたのも、この維新の成果なのである。これを起点に日本は欧米の政治制度、先進技術、教育理念など様々なものを取り入れることに尽力し、国力を飛躍的に伸ばした。僅か 30 年後には、日本は“日清戦争”で清の海軍を打ち破り、強国の一つにのし上がったのである。

しかし、松平容保のような人物は、あくまで保守的であること、そして、強大な日本の“維新”に敵対することを目指し、保守的で進取の精神がなく、腐敗して崩れかけた幕府を守ることに尽力した。私たちの考えでは、こうした旧勢力の代表で、歴史に逆らって行動する立場の人物は、日本人からしても、批判の対象となるはずである。しかし、実際にはそうでもないのである。松平容保は“幕府のためになってはならぬと明らかに知って”いながら、その上で幕府を守ることに全力を注いだ。その行いは代々語り継がれ、人々は、彼の家臣が行った卵で石を叩くような抵抗を演繹して“会津魂”と呼んだ。かつて司馬遼太郎は、「会津を思い起こせば、日本人という民族もまだ救いようがない訳ではないと感じる」と語ったことがある。

に中国を見てみると、同様に“忠君”の理念を持ち、当時の先進的な政治制度に反対し、歴史の流れに逆らって行動した人物がいた—1917 年、安徽軍の指揮者である張勲は、北京で廃帝の溥儀を復活させたが、わずか 12 日で破綻している。“辮帥”張勲と彼の部下“辮子兵”は道化物のように笑われる存在であり、歴史的な恥のひとつに数えられている。

西郷隆盛(1827—1877)も似たような状況である。西郷隆盛は幕末に最も活躍した政治家の一人で、木戸孝充(桂小五郎)、大久保利通と共に「維新の三傑」と称される。しかし、こうした輝かしい名声を持つ維新派の代表人物も、士族の特権排除に対する不満や“征韓論”が受け入れがたいといった理由から、明治十年(1877)2 月から 9 月にかけ、鹿児島の士族による反政府内戦“西南戦争”を指揮した。この戦役で維新政府と闘った結果、武士階級は徹底的に壊滅させられたのである。西南戦争の終結後、天皇が政権を主導する軍国主義国家が成立したが、これは日本の資産階級による革命が終わったことを意味した。

後年、西郷隆盛は没落した武士階層を率いて反乱を起こした。維新政府に抵抗するその行動も、“維新の敵”と呼ばれるべきものである。しかし、こうした人物も、同様に人々から慕われ、“庶民の英雄”と呼ばれて様々な伝説を残した。1889 年、彼は憲法の公布と同時に特赦を受け、正三位の官等を追贈されている。明治三十二年(1898 年)、東京の上野公園にその銅像が建てられ、世間の人がこれを仰ぎ見るようになった。1977 年、西南戦争の百周年記念の年、鹿児島に“西郷南洲顕彰館”が設立された。

同様に封建時代の旧勢力の利益を守るため、当時の先進的な政治制度に反抗し、歴史の流れに逆らって行動しながら、なぜ、日本の松平容保、西郷隆盛と中国の張勲とでは本国で受ける扱いに雲泥の差があるのだろうか？中日間に明確な違いのある“義理観”によりこの問題を分析してみよう。

“会津魂”の信条は、“命を捨て主君に忠義を尽くすこと”である。松平容保は初代藩主・保科正之が定めた家訓「大君の義、一心大切に忠勤を存すべく、列国の例を以て自ら処するべからず、若し二心を懐かば、則ち我が子孫にあらず、面々決して従うべからず」を厳格に守った。これは会津藩の基礎となるものであり、臣民の血と命、そして藩全土を代償にしても、この鉄の掟を履行したのである。

西郷隆盛は維新の元老として尊敬を集めたが、没落する武士階層の利益を守るため、「一郡対一国」の悲壮な戦争を始め、被弾すると「ゆっくりと座して襟を正し、東を遙かに拝んで」最後に介錯を頼み、自らの一生とその戦争を終えた。彼の失敗により、武士階層の徹底的な壊滅が宣告された。彼は、武士の最後の栄光を守るため、平然と死を選んだのだとも言えるだろう。

松平容保が忠義を尽くした“主君”は幕府と将軍であり、西郷隆盛のそれは“武士階層”であった。彼らは共に自身の信念を持って全力を尽くしたのである。彼らにとっては、自分が固く信じる“義理”のために奮闘することこそが正義だったのだ。それは、日本の伝統である武士道の片鱗でもある。武士道とは、義理を尊ぶ戦士の道なのである。こうした正義は間違いや国家、民族社会に関わるものではなく、自分が固く信じる“義理”にのみ関わるものなのである。思うに、正にこうしたことが、松平容保と西郷隆盛が日本では今も尊敬を集めている理由なのである。

しかし、中国において人々が尊ぶ絶対的な意味での“正義”とは、人類や社会、歴史レベルから見た正義なのである。忠誠を尽くして努力しても、その対象が誤っていれば、その人物や勢力の行為を全て正しいと語ることはできないのである。それが忠誠のためであったとしても、せいぜい“愚忠”に数えられるくらいである。張勲が忠誠を尽くした対象は、没落した封建的な統治者である。歴史の前進という奔流に抗うなどという行為は、身の程知らずということになるのだ。中国人から見ると、根本的な出発点が誤りであったため、彼の行為はプラス評価されることがないばかりか、むしろ笑いぐさとなってしまったのである。

松平容保と西郷隆盛、そして、張勲から見いだすことができるのは、中日両国で明らかに異なる“義理観”である。中国人の“義理”は歴史の高みからマクロ的に見たものであるため、進歩的で歴史の流れに順応し、人類社会の普遍的な価値観に沿った行為でなければ正義と称することができない。しかし、日本人の“義理”は、ミクロ的観点からに見た歴史によって評価されるものであり、個人や小さな組織が認める価値理念にさえ従っていれば、たとえ法律や普遍的な社会ルールに矛盾していても、正義と呼ばれることがある。

一言で言うと、中国人が崇める正義は国、民族ないし歴史や社会発展に関わる“大きな正義”であり、日本人のそれは個人の信念、団体の利益などを包む“小さな正義”なのである。この二つの価値観に優劣はないし、どちらかが正しいというものでもなく、文化の伝統、歴史や習慣により、そうなっているだけのことである。